

『共同執筆』

大谷美智浩

場所

倉田克巳のマンション、そのリビングルーム。

人物

倉田克巳
倉田洋子
滝沢周平
奈美
倉田幸治

1

第一場

倉田克巳が食事の用意をしている。
ソファにどっかりと腰を下ろして、隣人の倉田幸治が
新聞を広げている。

幸治「奥さん夜勤すか？」

倉田「いえ、今日は帰ってきます」

幸治「イヤー、大変ですよね、看護師さんも」

倉田「大変みたいです」

幸治「で、何時もこうやって倉田さんがお食事を？」

倉田「ええ、まア何時もと言う訳にはいきませんが、
．．．で
きる時はお互い助け合って（微笑む）」

幸治「偉い、偉いなア」

倉田「いや、偉かないですよ」

幸治「奥さん、愛してんだ？」

倉田「ええ、まア．．．人並みには（愛想笑い）」

幸治「人並みにはって、またア、酷だなア、バツイチに向かって」

倉田「（愛想笑い）ははは」

幸治「倉田さんって、あれなの？」

倉田「は？」

幸治「浮気したことないの？」

倉田「僕がですか？ありませんよ、そんな（愛想笑い）」

幸治「またあ・・・」

倉田「ホントですよ、したくたつて出来ないし、僕モテないから」

幸治「けどアレでしょ、劇作家って、若い女優さんなんか知り合う機会多いでしょ？」

倉田「僕は本書くだけですから、稽古場にもほとんど行きませんし・・・」

幸治「そうスカ・・・」

短い間。

幸治「アレ電話した事あります？」

倉田「アレ？」

幸治「ホテル」

倉田「ホテル？」

幸治「よくポストン中に入ってるじゃ無いですか、自宅スピード出張ってやつ」

倉田「ああ、ありますね」

幸治「（勢い込んで）あります？電話した事？」

倉田「いえ、ありませんけど」

幸治「アレ幾らぐらいなんスカね？」

倉田「さア」

幸治「今夜あたり電話してみようかな、俺。一人暮らしは色々と

寂しいもんスカらねえ（ニヤニヤと笑う）」

倉田「（愛想笑い）」

幸治「・・・報告しましょうか？」

倉田「え？」

幸治「ほら、劇作家なんだから色々取材しなきゃでしょう？」

倉田「ああそうですね、まあその節は・・・」

幸治「報告しますよ」

倉田「どうも・・・」

洋子が帰って来る。

洋子「ただいま・・・あら」

幸治「ども」

倉田「手紙届けて下さったの」

洋子「あらまたですか？いつもすみません」

幸治「いいんすよ、同じ倉田で隣同志なんすから、郵便屋さんだ
って間違えますよ」

倉田「ホントにお手数おかけして」

幸治「(立上がり) いえいえ、お互い様ッスよ。・・・あ、アレ
ありますかね？」

倉田「アレ？」

幸治「バスルームの電球の球。予備買ってないスか？」

洋子「ああ、ありますよ(奥へ退場)」

幸治「(洋子に) すみませんね、さっき便所行ったら切れちゃつ
て、もう困っちゃった・・・(倉田に) 今日のバスルーム
は重要ッスからね(ニヤリ)」

倉田「・・・」

洋子「(出てきて) どうぞ」

幸治「どうもすみません、明日買ってお返ししますから」

洋子「いえ、ついでの時で結構ですから」

幸治「そんじゃ、どうも」

幸治、玄関へ退場。

洋子「(送って行き) どうも有り難うございました」

洋子が戻って来る。

倉田「何とかしてくれよアイツ」

洋子「だれ？」

倉田「隣の倉田だよ！」

洋子「どうかした？」

倉田「チャイム鳴らさないんだよアイツ！いきなりガチャッて入って来るんだぜ」

洋子「自分で言いなさいよ」

倉田「苦手なんだよ、ああいうタイプ」

洋子「あなたに得意なタイプなんて無いじゃない」

倉田「たかが手紙届けに来たぐらいで、偉そうに座って新聞広げるんだぜ」

洋子「ほらほら血圧上がるわよ。あ、少し上がった方がいいのかあなたの場合。ああもうお腹ペコペコ！」

倉田「おい着替えて、手洗つてうがいして！看護師だろ君は？」

洋子「はいはい、あなたが看護婦じゃなくて患者は幸せね。あ、そうだ、おみやげ」

洋子は倉田に瓶を渡す。

洋子「無色透明ですぐに効く毒。探してたんでしょ？」

倉田「持って来ちゃったの!？」

洋子「皆そうしてるわよ、ゴキブリ退治に（着替えに退場）」

倉田「・・・（奥に）何て薬？」

洋子「（奥から）え？」

倉田「（奥に）これ、何て薬？」

洋子「（奥から）知らない、明日聞いてみるわ婦長に」

倉田「知らないって、名前が分からなきゃ本に書けないじゃない

か・・・（カウンターの上に瓶を置いて退場）」

しばし舞台は無人となる。

やがて原稿を持って倉田が登場。

倉田「（奥に）上がったよ、さつき。・・・洋子、聞いている？」

洋子「（出て来て）御免なさい、うがいしてたから。何？」

倉田「ラストの書き直し。さつき出来上がったんだ」

洋子「やったじゃない」

倉田「聞きたい？」

洋子「食べながらでもいい？」

倉田「もちろん」

洋子、テーブルについて食事を始める。

倉田「主演女優、点点点、ー」

洋子「(遮って) まだ名前ないの？」

倉田「(出鼻を挫かれて少々イラッと) 名前はいつも一番最後にするんだよ、デリケートな問題なんだから名前をつけるって事は。いつも言ってるじゃないか」

洋子「御免なさい、もう完成したのかと思ってたから」

倉田「完成してたんだよ、この作品は！あの馬鹿プロデューサーが変ないちやもんつけなきや書き直す事なんかなかったんだよ！」

洋子「(優しく) ねえ、早く先を聞きたいわ」

倉田「(気を取り直して) 主演女優、点点点、『私達、運命に遊ばれたのね』、点点点。劇作家、括弧優しく主演女優を抱き締める。主演女優、点点点括弧、泣きながら、『本当に』、点点点、『私愛してたのよ』、点点点。劇作家、点点点、

『そう、僕もさ』、点点点、『でもね、愛してるってだけ
じゃどうしようもない事だってあるんだよ』、点点点、「」

洋子「(遮って) 点点点が多いわね」

倉田「(苛々と) 点点点は舞台じゃ言わないからいいんだよ」

洋子「じゃ今も省いてくれない。点点点が耳についちやって話が
ちつとも分らないわ」

倉田「もういい、もうやめた」

洋子「どうして？」

倉田「君には作家の心が分からない」

洋子「そりゃ、あたしは看護婦だもの。だけどあなたの作品の一
番のファンよ、そうでしょ？」

倉田「(再び気を取り直し)そしてラストだ、主演女優が劇作家
に聞く。『あたし達これからどうなるの？』すると劇作家
が答える、これが最後の台詞。点点点、『そう、ハッピー
エンドにでもしようか？』点点点、ゆっくりと明りが落ち
て、幕・・・」

短い間。

倉田「・・・どう？」

洋子「（口の中のものを喉に押し込んで）天才だわ」

倉田「ホントにそう思う？」

洋子「これならあの馬鹿プロデューサーだってグウの音も出ないわよ」

倉田「よし！・・・これから来るんだ滝沢さん」

洋子「だれ？」

倉田「馬鹿プロデューサー」

洋子「これからって、何時？」

倉田「9時ごろだって」

洋子「もう9時じゃない、（テーブルを見て）どうしよう」

倉田「いいよ食べてて。あの人、そういう事気にしないから」

洋子「あたしが気にするわよ。寝室で食べるわ（運び始める）」

倉田「ほんとに大丈夫だって」

洋子「いいからあたしの事は気にしないで、あなたはお仕事頑張ってる」

倉田「（妻の手を取り）洋子、君が居てくれて、ほんとに僕は、

何て言ったらいいか・・・」

洋子「（笑って）どうしたの、あらたまってる」

倉田「愛してるよ、ほんとに」

洋子「あたしもよ、まだ新婚の気分なの」

倉田「新婚旅行だっ行って行けなかった・・・」

洋子「あたしもあなたも忙しかったもの」

倉田「君は忙しかったけど、僕はお金が無かったただけだ」

洋子「だけど今度の本で大金持ちよ、あたしが保証するわ」

二人、見詰め合う。

そこへ隣の倉田が来る。

幸治「どーも、隣の倉田ですけど」

倉田「(慌てて離れて) あ、はい・・・」

幸治「お味噌、ありますか？予備の」

倉田「予備の味噌はありませんけど、いいですよ、少しなら・・・」

洋子「今、持ってきますね。(台所に向かう)」

幸治「いやー、メシ食おうと思ったら味噌切らしちゃってて」

倉田「あもう、倉田さん・・・」

幸治「はい？」

倉田「今度からチャイム鳴らして頂けます？いや、あの、もし気が向いたらいいんですけど・・・」

幸治「あ、チャイムね、そうかチャイムかア、いや俺ね、部屋に

帰る時チャイム鳴らさないもんだから、つい」

倉田「・・・」

洋子「(出て来て) どうぞ」

幸治「すみません、いつも」

洋子「いえ、お互い様ですから」

幸治「そんじゃ、どうも(退場)」

洋子「どうも、おやすみなさい」

短い間。

倉田「・・・あいつは君に気があるんじゃないか」

洋子「なに言ってるの」

倉田「だって、何でいつも家にはっきり物借りに来るんだよ？」

洋子「同じ倉田どうしなんだから」

倉田「たまたま倉田だったただぞつ、親戚でも何でも無いんだ

よ!?!なのにアイツはこの部屋を自分ちと同じ感覚で生きてるんだぞつ！」

洋子「ほら機嫌直して、大事なお客様がいらっしやるのよ」

ドアチャイムが鳴る。

二人、ハツとなる。

洋子「あたしは寢室に居るから、頑張つて（お互いに手を振り合つて退場）」

倉田「はい、どうぞ、開いてます（玄関へ迎えに行く）」

やがて倉田に案内されて滝沢周平が現れる。

滝沢「どうも、スミマセンね、夜分におしかけちゃつて」

倉田「いいえ、丁度良かったんです、さつきラストが書き上がり
ましたから」

滝沢「ああラストね、もう書き上がったんですか？早いんですね」

倉田「結構早いですよ、僕、アイデアが浮かぶまでが大変なんですけど。浮かんじゃえばもう後は・・・」

滝沢「・・・座つていいですか？」

倉田「ああ、どうぞどうぞ。何かお飲みになりますか？」

滝沢「じゃ水割りを」

倉田「はい、それじゃその間にこれを（ラストの原稿を手渡す）」

倉田が水割りの用意をする間に滝沢は原稿に目を走ら

せるが、やがて気のない様子で原稿をテーブルに置く。

倉田「どうでしょう？」

滝沢「ああ、書いてますね、最後まで」

倉田「運命に弄ばれた二人が、それでも残りの人生はハッピーエンドにしようと、固く心に誓い合って、幕が降りていくんです」

滝沢「ああ、成る程・・・」

倉田「どうでしょうか？」

滝沢「うん、狙いは分かりますよネ、確かに」

倉田「（興奮して）良かった、そう言って頂けると思っていました。

きつと気に入って頂けるって（笑う）」

滝沢「ええ・・・」

間。

倉田「・・・あのう」

滝沢「はい？」

倉田「お聞きしてもいいですか？」

滝沢「なんででしょう？」

倉田「そのう……気に入って頂けたんでしょうか？」

間。

滝沢「……推理劇はね、難しいんですよ」

倉田「……」

滝沢「客が頭を使わにやなんですから」

倉田「……」

滝沢「それにこの本、犯人分かつちやいますネ、最後まで見たら」

倉田「いや最後まで見て犯人が分からないと、お客さんはかなり気持ちが悪いと思うんですが……」

滝沢「いずれにしてもね、興行的に難しいんですよ、推理劇は」

倉田「……それじゃあもう、新作を書けと？」

滝沢「そりゃあ、だって、いくら倉田さんの筆が早くてもそれじや間に合わないでしょ、やっぱり、来月には稽古が始まるんだから」

倉田「……では、あもう、僕はどうしたら？」

短い間。

滝沢「……共同執筆というのは、どうでしょう？」

倉田「……？」

滝沢「もう一人の作家と組んでネ、やってみませんか？」

倉田「……」

滝沢「僕の妹が作家志望でしてね、結構面白い本書くんですよ、これが。そう、倉田さんが講師で行ってるシナリオスクールの生徒でしてネ……」

倉田「あもう、滝沢さん」

滝沢「はい？」

倉田「僕にはそのう、無理だと思っんですけど」

滝沢「無理？」

倉田「共同執筆と言うのは、ちよつと……」

滝沢「……無理ですか？」

倉田「そのう、実は、僕は人一倍人見知りする質たちでして、それで知らない人と長く居ると何だか息が詰まって、呼吸困難になっちゃってしまつて、もう何にも手に付かなくなるんです。ですからそのう、今までそういう仕事を避けて生きて来た訳で、つまり、一人でやれる仕事と言うんでこの道に入ったような所もありますし……」

滝沢「妹、結構美人なんですヨ」

倉田「（興奮して）ぼ、僕を殺す気なんですか！（ボトルをひっくり返す）」

滝沢「まあまあ落ち着いて」

倉田「す、すみません、取り乱しちゃって（ティッシュでテーブルを拭く）」

滝沢「だってシナリオスクールの講師をやってるんでしょ？」

倉田「僕の場合は、そのう、講義はせずに、作品の添削だけと言う事で……」

滝沢「そうですか……しかし、そういう事なら、まア、降りてもらおうより無いか……」

倉田の動きが止まる。

倉田「は？」

滝沢「降りて貰うよりないですネ、残念ですけど」

倉田「……」

滝沢「この本は頂きますよ、貴方には前金をお支払いしてありますか
ら」

倉田「……この本を、僕から取り上げると」

滝沢「ビジネスですからネ、投資した分は元を取らなきゃ。私も

遊びじゃ無いんで」

倉田「書き直します、どこがいけないんですか、言って下さい」

滝沢「だって、書き直してもコレですもんネ」

倉田「もう一度頑張ります、もう一度チャンスを下さい！」

滝沢「(舌打ちして) あなたには才能がないんですよ、倉田さん。
……そこまで私に言わせないで下さいよ」

倉田「……」

滝沢「台詞は成ってないし、構成も稚拙。犯人の動機も不自然ですよ、自分のプライドが傷付くぐらいで人を殺しますか？
だったら現代人の半分は殺されてますよ」

倉田「……」

滝沢「貴方はもっと犯罪者の心理を研究すべきじゃないかな、こういう本を書きたいんなら」

倉田「……」

滝沢「ちよつときつい言い方になりましたネ。気に障ったら勘弁して下さい」

倉田「はぁ……」

滝沢「僕はね、まあ、貴方にもっと勉強して貰いたくてネ」

倉田「……」

滝沢「倉田さんとは長い付き合いだし、今まで助けて貰ったこと

も、まア、無かったわけじゃありませんからネ。僕としても、貴方には成功して頂きたいんですよ、ほんとに。・ ・ ・だからネ、ちよつと考えてみて下さいよ、共同執筆。ホント、身内が言うのも何なんですけど、結構才能あるんですから」

倉田「・・・」

間。

滝沢「・・・お酒、無いんですけどネ」

倉田「あ、はい・・・」

倉田、打ちひしがれてカウンターへ向かう。

すると、ボトルの横にあった瓶に目が留まる。

横目で滝沢の様子を伺い、素早く瓶をポケットにしま
い新しいボトルをテーブルに運ぶ。

滝沢「それに妹はネ、大のミステリーファンなんですヨ、ね、も

うこの作品には打って付けだと思いませんか？」

倉田「はい。・・・あ、氷を」

倉田は滝沢のグラスとアイスペールを持ってカウンタ
ーへ向かう。

滝沢、原稿をもう一度手に取って眺める。

倉田、震える手で、グラスに瓶の中身を注ぐ。

倉田「あの、どうぞ（グラスを差し出す）」

滝沢「（グラスを受取り）長居するつもりは無いんですけどネ、
妹を呼んじまったもんですから」

倉田「・・・え？」

滝沢「ほら、共同執筆させるつもりでネ、呼んだんですよ」

倉田「どこに？」

滝沢「ここに。もうすぐ来ると思うんだけど（酒を飲む）」

倉田「（パニック）え、え？・・・ああ待って、それ飲まないで
っ!!」

滝沢「（飲んでしまった）なに？」

倉田「（滝沢を見たまま立上がり）よ、洋子っ、洋子！ちよつと
来てっ！」

滝沢「一体どうしたん・・・（グラスが手から落ちる）」

倉田「（悲鳴）洋子っ!!」

洋子「(慌てて出て来る) どうしたの、そんな大きな声出して
・・・」

滝沢がもがき苦しみ、やがてバタリと倒れる。

倉田「・・・げ、下剤・・・」

洋子「(滝沢を見つめて) どうしたの？」

倉田「・・・の、飲ませちゃった・・・」

洋子「え？」

倉田「の、飲ませちゃったの、あ、あの、毒・・・」

洋子「・・・嘘でしょ？」

二人、滝沢を見下ろす。

倉田、弾かれたようにギクシヤクと玄関に歩き出す。

洋子「何処行くの？」

倉田「と、隣行って、貰って来る、げ、下剤・・・」

洋子「ちよつと待って」

洋子、滝沢の脈を取る。

洋子「・・・死んでるわ」

倉田、腰を抜かして座り込む。

倉田「ど、どうしよう・・・どうしよう洋子っ！」

洋子「(倉田の手を取る)」

倉田「殺しちゃった、僕人殺しちゃった！」

洋子「いい子だから、いい子だからパニック起こしちゃ駄目よ、
ね」

倉田「僕は死刑になるんだ！」

倉田「(二人同時に) この若さで人生が終わるんだ！ああ、子供の時に昆虫採集なんかしなけりやよかった！きっとこれはあのセミの呪いなんだア！」

洋子「(二人同時に) そんな事ない、そんな事させない！まだ終わった訳じゃないの、あたし達の生活は終わりじゃないの！だから、お願い」

洋子「あたしを信じて！」

倉田「(泣きながら)・・・偉い弁護士雇ってくれる？」

洋子「バレなきやいいんでしょ？」

倉田「え？」

洋子「この事、誰も気付かなきゃいいんでしょ？」

倉田「・・・」

洋子「(死体を見て)・・・始末するの」

倉田「は？」

洋子「死体を始末するの！」

倉田「(驚愕する)・・・!!」

洋子「大丈夫よ、あなたは天才なんだからきっと乗り切れるわ」

倉田「そ、そんな・・・」

洋子「じゃ警察呼ぶ？」

倉田「(慌てて首を振る)」

洋子、台所へ向かう。

倉田「ど、どうするの洋子？」

洋子「(雑巾を持って来て倉田に放る)指紋拭き取って」

倉田「指紋？」

洋子「(グラスやボトルなどをトレーに乗せながら)この人が触ったところ全部拭くの。家に指紋が残ってちゃ困るでしょ？」

倉田「だって、何処触ったかなんて覚えてないよ！」

洋子「まずドアノブ、それからテーブルと椅子ね。このグラスは洗っちゃうから」

滝沢の携帯電話が鳴る。

かなり陽気なメロディが響き渡る。

倉田「(驚いて) な、なに？」

洋子「・・・電話」

倉田「ん？」

洋子「滝沢さんの携帯電話が鳴ってるの」

倉田「・・・出る？」

洋子「駄目よ！あたし達と一緒にだったって分かっちゃうじゃない？」

間。

やがて音が止まる。

ホツとなる二人。

倉田「(気付いて) だ、駄目だ！」

洋子「なにが!？」

倉田「もうすぐ来るんだ」

洋子「誰が？」

倉田「この人の妹さん」

洋子「妹さん？」

倉田「そう」

洋子「ここに!？」

倉田「そう」

洋子「何しに？」

倉田「何かしに……」

短い間。

洋子「大変じゃない!？」

倉田「た、大変なんだ! どうしよう?」

洋子「死体隠さなきゃ」

倉田「え?」

洋子「隠さなきゃ死体!」

倉田「ど、何処に?」

洋子「……寝室しか無いわね」

倉田「死体と一緒に寝るの!？」

洋子「夜中に車で捨ててに行くわ」

倉田「何処にっ!？」

洋子「それはその時考えるの、とにかく早く運ばなきゃ!」

二人で滝沢の足に手を掛ける。

洋子「あなたは上半身!」

倉田「ええっ、だって僕ヘルニアなんだよ」

洋子「ヘルニアと電気椅子とどっちがいいのっ!」

二人滝沢を持ち上げる。

倉田「(腰に痛みが走る) ああっ!」

洋子「頑張って、痛くない痛くない!」

倉田「(一歩ずつ歩く度に) ああっ! ああっ! ああっ!」

幸治「(入って来る) どーも、隣の倉田です」

三人、見詰め合う。

倉田と洋子が滝沢の身体を取り落とす。

洋子「（咄嗟に滝沢に向かい）ほらヨツちゃん、だからお酒は程々について言ったじゃない！」

倉田「（悲鳴に近く）倉田さんチャイムっ！お願いだからチャイムっ！」

幸治「ああチャイム、そうそうチャイムね。・・・大丈夫スカ？」

洋子「（笑って）遠縁のいとこなんですけど、お酒に弱くて」

幸治「手伝いましょうか？」

倉田「大丈夫ですから、ホントにもう何の心配もありませんから」

幸治「だって倉田さんヘルニアだって言ってたじゃないスカ、手伝いますよ」

幸治、倉田に代わって滝沢に手を掛ける。

倉田「す、すみませんね」

幸治「どこへ？」

洋子「・・・じゃあの、ベットにお願いします」

幸治と洋子が滝沢を持ち上げると、滝沢の携帯電話が鳴り始め、また陽気なメロディが響き渡る。

固まる三人。

幸治「……携帯鳴ってますよ」

洋子「……え？」

幸治「鳴ってるの、携帯じゃないスか？」

短い間。

洋子「(倉田に)何か、聞こえる？」

倉田「え？」

洋子「聞こえる？何か」

倉田「……いや、なんにも」

幸治「え!？」

携帯電話は鳴り続けている。

幸治「……聞こえないスか？」

洋子「ええ、なんにも」

短い間。

携帯電話が鳴り止む。

幸治「(ホツとして) ああ、俺も何にも聞こえないっス」

二人、笑いながら滝沢を運んで行く。

倉田、一人残ってテーブルを拭き始める。

幸治「(戻って来て) マメだなア、同じ倉田でどうしてこうも違うかなア」

倉田「あのう、何かご用ですか？」

幸治「あ、お醤油をね、ちよつと貸して貰おうかなアなんて」

倉田「(奥に) 洋子、醤油だつて！」

幸治「ああ大丈夫大丈夫、分かりますから(カウンターの中心に入る)」

洋子が戻って来る。

倉田「(小声で) どうしてアイツは醤油が何処にあるか知ってるの？」

洋子「(小声で) 同じ間取りだからじゃない」

倉田「（小声で）だけど醤油を何処に置くかは個人の好みだろ!？」

洋子「（小声で）あつ、靴！（滝沢の靴を取って寝室に向かうが）

あなた、靴っ！（退場）」

倉田「・・・!!」

倉田、玄関にダッシュして靴を取って戻って来る。

幸治が醤油を片手に色々物色していたが、ふと、小瓶に気がつく。

幸治「これ、なんかの調味料スか？」

倉田「（叫ぶ）それはダメえ！（瓶を奪い取る）」

幸治「（驚いて）な、なんスか？」

倉田「（必死に）なんでも無いの、これはなんでも無いの！」

短い間。

幸治「ああつ、それアレだ」

倉田「（怯えて）ええっ？」

幸治「それは、元気になるヤツだ（ニヤリ）」

倉田「・・・」

幸治「夫婦円満の秘訣は、ソリだ」

洋子が戻って来る。

幸治「（意味あり気に二人を見て）そんなやどうも、オヤスミな

さい（退場）」

倉田「・・・（瓶を見つめて）今回うまく乗り切ったら、次はア
イツだ」

洋子「（椅子に腰を下ろし）殺人鬼ね、・・・ああ疲れた」

倉田も靴と瓶をテーブルに乗せて腰を下ろす。

洋子「（叫ぶ）靴っ！（靴を取って寢室へダッシュユ）」

ドアチャイムが鳴る。

倉田「・・・き、来た・・・」

ドアチャイムが鳴る。

倉田「(奥に) 洋子、来た！」

ドアチャイムがけたたましく鳴る。

洋子「(出て来て) 早く出て」

倉田、玄関に走る。

やがて、倉田が奈美を連れて戻って来る。

奈美「(洋子を見て足を止め) 誰？」

倉田「・・・家内ですけど」

奈美「奥さん!？」

洋子「はい」

奈美「(倉田に) ちょっと聞いてないわよ」

倉田「・・・は？」

奈美「・・・お宅、倉田さんでしょ？」

倉田「はい」

奈美「奥さんも一緒なの」

倉田「はい・・・」

奈美「(舌打ちしてソファに腰を下ろしながら) 一時間三万なん

「だけどちよつと色付けてもらわなきゃね、トリプルだと（
煙草に火をつける）」

二人「・・・」

奈美「ア、あたしでいいの？チェンジ出来るのよ、ウチのお店」

二人「・・・」

奈美「（腕時計を見て）9時からの予約だったからちよつと休憩
させてね、後10分あるから。・・・灰皿、ある？」

倉田「（洋子に）ある？」

洋子「うち、誰も煙草吸わないから・・・」

奈美「早く言ってよ、もう火つけちゃったじゃない。・・・この
瓶だめなの？」

倉田「あ、いやそれは！じゃそのグラスにでもどうぞ、どうせ洗
いますし」

奈美「そう、悪いわね。で、あたしでいいの？」

短い間。

倉田「・・・ええ、そりやもちろん」

洋子「・・・？」

奈美「じゃ（手を差し出す）」

倉田「はい？」

奈美「前金制なの、ウチ」

倉田「ああ、……えっとお幾ら？」

奈美「だから、一時間三万なんだけど……」

倉田「じゃ五万、五万でどう？」

洋子「……！」

奈美「（微笑んで頷く）」

倉田「はい、じゃ五万（奈美に手渡す）」

奈美「電話貸して貰える、悪いんだけど」

倉田「電話？」

奈美「お店に電話しなきゃ、携帯あんだけどバッテリー切れちゃって」

倉田「いや、あのう、うち電話止められてて……」

奈美「（五万を見て倉田に差し出し）先に払ったら？」

倉田「いや、今日お金が入ってね、明日払いに行こうと思ってたところだから」

奈美「携帯も無いの？」

倉田「無いんだ」

奈美「……どうやってお店に電話したの？」

倉田「外の公衆電話から。あのう先にシャワー浴びてこない？僕

がひとつ走り行って電話しとくから。ほら夜遅くに若い女の子が出歩くと物騒だし……」

奈美「やさしい（洋子に）いい旦那じゃん（グラスに煙草を捨てる）」

洋子「ええまあ……」

倉田「（上手のドアを開けて）こっち奥行って左側のドアだから、僕のバスローブ使って、脱衣所に掛かってる紺色の方だから」

奈美「サンキュー」

倉田「あ、時計時計、時計外して行かないと」

奈美、倉田に時計を渡す。

奈美「じゃお先に（退場）」

洋子「……何なのあの？」

倉田「（奈美の時計と自分の時計を見比べながら）ホテトルだよ」

洋子「え？」

倉田「ほら自宅スピード出張だよ」

洋子「……どうして家に出張して来たの？」

倉田「間違えたんだ」

洋子「は？」

倉田「間違えたんだよ、隣の倉田と」

洋子「じゃお隣りに行って貰いましょうよ」

倉田「（嬉しそうに時計を見せて）ほら」

洋子「・・・くれるの？」

倉田「時間だよ！30分遅れてるんだ（自分の時計を見て奈美の時計の時間を合わせながら）しかも彼女の携帯はバッテリー切れた」

洋子「・・・だから？」

倉田「お店がいくらヤキモキしようとな彼女に間違いを知らせる方法が無いんだよ。いいかい、彼女は8時50分に家に来たと思ってる。そしてこのまま何も気付かずに10時にここを出て行けば、犯行時刻の僕達のアリバイは完璧だ」

洋子「あたし達は変態夫婦だと思われるわよ！」

倉田「殺人犯よりマシだろ？お酒の用意だ、酔っ払わせて30分勘違いさせなきゃ・・・」

洋子「・・・だけど、30分も時計狂っててよく生活出来るわね、あの人」

奈美「（現れて）ねえ」

2

第二場

二人、奈美を見る。

奈美「ベットに寝てんのは誰なの？」

二人「・・・」

奈美「ちよつときア、身体もたないわよあたし（退場）」

ゆつくりと暗転。

前場と同じく倉田克己のマンション。

紺色のバスローブを着て頭にバスタオルを巻いた奈美が、煙草を吸いながら原稿を見ている。

テーブルの上にはお酒と簡単なおつまみ。

倉田と洋子が水割りを作っている。

奈美「台本書いてんだ」

倉田「ねえ本当にいららないのお酒？」

奈美「仕事中だから」

倉田「まアそう固いこと言わずにさ」

奈美「『ハッピーエンドだけじゃない』」

倉田「タイトルなのそれ。その台本の」

奈美「シャワー浴びないの？」

倉田「僕達はさつき浴びたから」

洋子「どう一口ぐらい？」

奈美「・・・なんか企んでんの？」

倉田「な、なにを、なにを僕達が企むの？」

奈美「あたし酔っても変態プレイなんかやんないからね」

洋子「(憤然と) あたしだってやりません、そんな事」

倉田「まあまあ、せっかく知り合えたんだから。ね、お近付きの
しるしって事で」

奈美「(グラスを受取り乍ら) 別に奥さんとお近付きになりたか
った訳じゃないけど」

洋子「(奈美を睨み付ける)」

倉田「ほら乾杯乾杯、ね、カンパーイ！」

三人、酒を飲む。

奈美「どんな話、これ」

倉田「推理劇なんだ」

奈美「・・・なに？」

洋子「（鼻で笑う）ハッ」

奈美「（洋子を睨み付ける）」

倉田「ミステリーだよ、ほら犯人が誰だか分かんなくて・・・」

奈美「ああ、あたし結構ミステリーファンだよ」

倉田「本当!？」

洋子「ミステリー読んだことおありなの？」

奈美「あるわよ『金田一少年の事件簿』」

倉田「・・・うん、ありやミステリーだ」

奈美「あとコナン」

倉田「未来少年？」

奈美「『名探偵コナン』」

倉田「ああ、そういうのがあるの？」

奈美「ちよつと話してよ、犯人当ててるから」

倉田「（自信の笑い）出来るかな」

奈美「・・・馬鹿にしてんの？」

倉田「あ、ある劇作家の家にね、俳優達が集められるんだ。彼等は丁度一年前に企画されていた、その作家がプロデューサーする芝居にキャスティングされてたんだけど、上演は出来なかったんだ」

奈美「なんで？」

倉田「演出家が殺されたのさ、その作家の家で」

奈美「ふーん、それでその犯人を探す訳？」

倉田「そう、作家は俳優達の中に犯人がいると睨むんだ。一年前の演出家が殺された夜には、クリスマスパーティーをやるうと言うんで、その全員が作家の家に集まっていたんだからね」

奈美「強盗だったかも知れないじゃん」

倉田「うん、そりゃ、まあそうなんだけど、そういう所まで可能性を広げるとき、これはもう推理劇にはならないからさ」

奈美「ふーん。そんで？」

倉田「作家は皆の前に、殺された演出家の服を着て現れる」

奈美「なんで？」

倉田「つまり作家と演出家は背格好がピッタリ同じなんだ」

奈美「だから？」

倉田「だからつまり、演出家は間違えられて殺されたんだ。犯人が本当に狙ってたのはその作家だったんだと証明して見せるんだよ」

奈美「・・・そんなんで証明になんの？」

倉田「（しどろもどろに）いや、だからね、その演出家が殺され

た状況と言うのがね、それは二階にある作家の書斎でさ、部屋は薄暗くて、そのうえ演出家は作家のガウンを着て、それで後ろから殴られて殺された訳だからさ、これはもう完璧に作家と間違えられたという状況、だと思わない？（段々と声が小さくなる）・・・」

奈美「それで、俳優達はその証明を信じんの？」

倉田「うん、まあ、信じるんだけど・・・」

奈美「アツタマ悪いんだ、役者って」

倉田「そ、そうかなア・・・どう思う洋子？」

洋子「（瓶を見詰めていたが、ハツとなり）え、なに？」

倉田「（信じられない）寝てたの？」

洋子「聞いてたわよ、どうぞ続けて」

奈美「（手で催促）」

倉田「・・・そ、それでね。その役者達は、まあ、馬鹿ばかりだったモンだからその証明を信じてね、じゃ誰がその作家を殺そうとしたのかって話になるんだけど・・・」

奈美「で、その俳優達ってどういうメンバー？」

倉田「全部で4人居るんだ。主演女優と主演男優、助演女優と助演男優」

奈美「名前ないの名前っ!？」

倉田「まだ無いんだ名前……」

奈美「(舌打ちして)そんで、そいつらには作家を殺したくなる動機があんの？」

倉田「その作家は傲慢な男でね、俳優達からかなり憎まれている存在なんだ。まず主演男優はお笑いタレント出身だから、作家から何時も侮辱されて頭に来ている。次に助演男優はかなりのおじいちゃん、台詞もろくに覚えられず作家から馬鹿にされている。そして助演女優は芝居はうまいんだけど、顔が不細工なもんだから作家から笑われた」

奈美「主演女優は？」

倉田「(ここだけいかにも素っ気なく)主演女優は作家の婚約者なんだ」

奈美「じゃ犯人はそいつだ」

倉田「(ドキッ)な、なんで？」

奈美「だって一番犯人ぽく無いじゃん」

倉田「(あんぐりと口を開ける)」

奈美「ああ、当たり？」

倉田「(頷く)」

奈美「フーン……ねえ、これ何時間の芝居なの？」

倉田「2時間半……」

奈美「始まって10分で犯人分かっちゃったら、後の2時間20分、客は何してたらいいの？」

倉田「(うなだれる)」

洋子「(ハツとなり)聞いてたわよ、・・・なに？」

奈美「奥さんもう寝たら？」

洋子「大丈夫です」

幸治「(上手ドアから現れて)倉田さん」

倉田「(驚く)うわあーっ、・・・な、何ですか、どっから来たんですか？」

幸治「ベランダ。戸が開けっぱなしだったから不用心だなって」

倉田「だ、だからってベランダから来る事無いじゃないですか！」

幸治「(奈美に気付いて)あ、どうも」

奈美「どーも」

幸治「(奈美を見て、それから倉田を見てニヤリと笑う)」

倉田「な、なんですか？」

幸治「(声を落として)元気になるクスリ、今度貸して下さいよ。そんじゃ(奥に向かう)」

倉田「ど、何処行くんですか!？」

幸治「ベランダ。あっちにクツ脱いじやったから(退場)」

倉田「(洋子に)非常識じゃないか、あれはもう非常識以上じゃ

ないか!？」

洋子「心配して来て下さったんだから」

倉田「(絶叫) 僕はアイツの存在自体が心配だアツ！」

奈美「(洋子に) あの人は何なの？」

洋子「お隣りの人・・・」

奈美「お隣りの人、ベランダから出入りしてんの？」

倉田「(テーブルの上の瓶を掴んで) そ、そんなに飲みたきや、

飲ませてやるよっ・・・」

幸治「(奥から現れて) いいんスか？」

倉田「(驚いて) まだ居たんですか!？」

奈美「ちよつとちよつと、こんなに相手が多いんなら10万は貰わ

なきや」

倉田「この人は関係無いから、もう、すぐ帰って貰うから」

幸治「(興味津々) え、10万? 何スか10万て？」

洋子「いいえ何でも、何でもないんです」

幸治「あっ！」

三人、幸治を見る。

幸治「倉田さんも呼んだんだ、スピード出張・・・」

洋子「う、家は呼んでません！」

三人、洋子を見る。

奈美「はあ？」

幸治「呼んでない？」

奈美「呼んでないの？」

幸治「じゃ、この人どうしてここに？」

倉田「・・・ぼ、僕が呼んだんだよ」

三人、倉田を見る。

倉田「(ヤケクソで)こ、この薬の効き目を試してみたかったんだよオっ！」

気まずい間。

幸治「・・・なにもそんな、大きな声で」

倉田「すいません、ちよっと興奮してしまいました」

幸治「飲み過ぎたんじゃないんですか？その薬(笑う)」

倉田「(愛想笑い)アハハハ」

幸治「幾らぐらいすんスカ、そのクスリ？」

倉田「まだ、試薬段階だから・・・」

幸治「(羨ましい)奥さん看護師だと、色々いいツスねえ・・・」

倉田「とにかくそういう事情ですので、今日の所は(幸治に頭を下げる)」

幸治「はいはい・・・報告、お願いしますよ(退場)」

奈美「どれくらい飲んだの、それ？」

倉田「いや、ほんのちよっぴり・・・」

奈美「延長は別料金だからね」

倉田「(グツタリとなり)もう、そんな体力ない・・・」

奈美「大丈夫？もうちよっと飲んだら？」

倉田「(ビクツとなり)え、いや、あ、うん、あの、あ、後で・

・・・」

奈美「(小声で)今度二人つきりで会おうか、その薬あるうちに(ウインク)」

洋子「いっそ、今全部飲んじやったら！」

倉田「(脅えて)ええっ!？」

洋子「(奈美に)あなたもどうですか？」

奈美「あたしは若いですから」

洋子「(フンツと横を向き) 身体もたないって言ってたじゃない」

奈美「変態プレイはやダツつたの！」

洋子「変態って誰の事！」

奈美「さアね」

洋子「(倉田に) ねえこの人誰の事言ってるの！」

倉田「ぼ、僕じゃないかな？」

奈美「ねえどうすんの？このまま10時までこうしてんの？」

倉田「(腕時計を見て) まだ後20分あるから」

奈美「20分!? (自分の時計を見て) あたしそんなにここに居た？」

倉田「ま、飲んで飲んで」

奈美「もう40分も過ぎちゃったの？」

倉田「楽しい時は過ぎるのも早いから (微笑む)」

奈美「楽しい事なんかあった？」

倉田「もう一回乾杯しよう！ね？」

奈美と洋子は乗ってこない。

倉田「はい、カンパーイ！」

二人、倉田を見ている。

倉田、グラスを空ける。

洋子「・・・あなた、楽しそうね」

倉田「(奈美に) あ、前に僕が書いたミステリーの話しようか？」

奈美「もういいわよ」

倉田「そんな事言わないでさ、ほら君ミステリーファンじゃない？」

奈美「それよりさ、この本」

倉田「ん？」

奈美「劇作家を犯人にしなよ(酒を飲む)」

間。

倉田「劇作家が犯人？」

奈美「そう」

倉田「・・・自分で、自分を殺そうと思ったの？」

奈美「それじゃ自殺じゃんか。自殺しようとして間違えて人殺す？頭使いなよ」

倉田「・・・」

奈美「別に誰と間違えたんでもなくて、作家が単純に演出家を殴

り殺したワケ。それで凶器を始末しようとして階段を降りようとしたところで、玄関から主演女優が入って来んの。作家はハッと身を隠す」

洋子「玄関から？」

奈美「そう」

倉田「主演女優は外に居たの？」

奈美「そう」

洋子「何しに？」

奈美「ストッキング脱いで、小石を一杯詰めてたの」

洋子「は？」

奈美「あれケツコウな武器になんによ、ストッキングに小石詰めると。ブンブン振り回したら、痴漢なんか一発で逃げ出すよ」

二人「・・・」

奈美「ただこの撃退方の弱点はね、ストッキング脱がされるまで、相手の自由にさせとかなきゃなんないってトコなんだけども、ともかく作家はそれを見て、ア、コイツは俺を殺しに行くんだなってピンとくんよ」

短い間。

洋子「……つまり作家は、婚約者である主演女優が、自分に殺

意を抱いていたことを知っていたのね……」

奈美「そういう事。で、演出家は作家の机に俯せで死んでんの。

彼女はそれを作家が居眠りしてんだと勘違いして、ストツキングブンブン振り回しながら近付いてって、一発ガツンとぶん殴る。それから窓を開けて小石を外にバラ撒いてからストツキング履いて、人違いだったことに気付く。悲鳴。彼女が第一発見者。だけど警察は彼女に手が出せない。だって彼女には演出家を殺す動機が見付からないから」

倉田「……成る程……」

奈美「どう？」

倉田「と、言うことは、つまり二人は、お互いに秘密を持ったまま一年間付き合ってたのか……、殺意を抱く女と、殺人を犯した男……悲劇だ、運命に弄ばれた二人だ！」

洋子「動機は？どうして作家は演出家を殺したの？」

奈美「その作家が書いた本はすんごく下らなかつたのよ。そこで演出家がほとんど書き直して作家に相談すんの。ここはこうした方がいいとか、この台詞はダメだとかね。だけど作家は才能無いわりにすんごくプライドが高かつたんで、逆

上して殴り殺しちゃうわけ」

洋子「（感心して）ああ」

倉田「有り得る、それは有り得る・・・」

奈美「作家は彼女が自白するのを待ってんの、あたしがやりまじ たって。そうなりや彼にとつちや完全犯罪じゃん。だけど 相手は素つとぼけたまま一年が経っちゃって・・・」

洋子「それで皆を集める訳ね、彼女の殺意を暴くために！」

奈美「そういう事」

倉田「だから自分が殺されかけた事を証明してみせるんだ、まず 自分を圏外に置くために！」

奈美「そのやり方はね、もうちよつと考えた方がいいと思うけど」

洋子「凄い、筋が通ってる・・・よりドラマチックになったわ！」

倉田「ああ神様、天才です、僕の目の前に天才が現れました！君 は何処で勉強したの!？」

奈美「『金田一少年の事件簿』」

倉田「それから『名探偵コナン』か、読まなきや、買って読まなきや・・・」

奈美「あと『ガラスの仮面』ね。あれケツコウ読み応えあるよ、 長いから」

倉田「（感動している）凄い・・・凄いアイデアだ・・・」

奈美「ねえ、ちよつとベランダに出てもいい？顔ほてってきちゃった」

倉田「(ドキッ) いや、あの、ベランダは寝室通らなきゃいけないから……」

奈美「……だから？」

倉田「だからそのう、寝室はちよつと……」

奈美「あたし寝室に呼ばれたんじゃないの？(ハツとなり) ここでエッ!? (洋子に) 変態っ!!」

洋子「(立ち上がる)」

倉田「(慌てて) じゃ行こう、ベランダに行こう、僕が案内するから、ね」

奈美「(連れて行かれながら) あたし理解出来ない、あんたの奥さん」

倉田「ま、いいからいいから(二人退場)」

洋子、憤然と奈美の煙草を吸い始める。

やがて、倉田が転がり出て来る。

洋子「(冷ややかに) なにやってんの？」

倉田「(蒼白の顔で口をパクパク)」

洋子「あの子に襲われたの？」

倉田「き、……消えたっ！……」

洋子「は？」

倉田「な、無いの！……」

洋子「何が？」

倉田「死体っ！」

短い間。

洋子「ええっ!？」

倉田「どっか行っちゃった……」

洋子「何処行くのよ、死体が！」

倉田「何処行ったんだろ？」

洋子「何処にも行くわけないじゃない、死体なんだから！（寝室に走る）」

倉田「（アタフタと後を追う）」

やがて玄関から幸治が現れる。

幸治「どーも……」

3

第三場

幸治、無人の部屋を見渡して、素早く瓶を取り一気に呷り、空瓶をテーブルに置く。

幸治「(鼻歌を歌いながら玄関へ退場)」

しばらくして、洋子が一人で戻って来る。

奥を気にしながら携帯電話を取り出す。

洋子「……もしもし、こっちは順調、うまく行ってます……」

急速に明りが落ちて、暗転。

前場と同じく倉田克己のマンション。

そのリビングルーム。

倉田と洋子、そして奈美の三人が居る。

奈美「消えた死体ねえ……」

洋子「そう……」

倉田「どういう事なんだろうね？」

奈美「は？」

倉田「どうして死体を隠す必要なんかあったんだろうね？」

奈美「それ考えんのがあんたの仕事でしょう？」

倉田「え、ああ、うん、まあ、そりやそうんだけど……」

洋子「一応のアイデアはあるのよね？」

倉田「もちろんあるさ、ただねホラ、色々と他の意見を参考にし

た方が、作品に奥行きが出るじゃない？」

洋子「(奈美に) あなたミステリーファンだし」

倉田「きつとまた、凄いアイデア聞かせてくれると思って(愛想

笑い)……」

短い間。

奈美「登場人物は劇作家と奥さんと、二人だけ？」

倉田「あと死体ね、今のところは」

奈美「で、夫婦がリビングに居る間に、寝室にあった死体が消え

るワケ？」

洋子「そう」

奈美「……そりや無理なんじゃない？もうちよつと人間増やさなきゃ」

洋子「そうよね……」

倉田「それは一体誰なんだろうか……」

奈美「だからそれ考えんのがあんたの仕事でしょつうの」

倉田「うん、そりやまアそうなんだけど……」

奈美「……で、その部屋何階なの？」

倉田「一階、ここと同じ。植え込み乗り越えれば、裏の路地に出て行ける」

奈美、考え込む。

奈美「……そう言えばさ、さつきベツトに誰か寝てたけど、アレその新作の予行演習かなんか？」

短い間。

倉田「……ああ！あれはあのう、遠縁のヨツちゃん、（洋子に）
だったよね？」

洋子「そうそう！」

奈美「で、どこ行ったの、そのヨツちゃん？」

倉田「うーんと、あ、トイレかな？」

奈美「トイレ？」

倉田「うん」

奈美「ずっと？」

倉田「うん・・・あ、もしかしたらトイレでまた寝ちゃったのかも知れないね」

奈美「・・・いいの？」

倉田「ん？」

奈美「起こさなくていいの？」

倉田「ああいんだよ、とにかく寝起きがとんでもなく悪い人だからね。ほっといた方がいいんだよ」

奈美「・・・トイレに行きたくなつた時はどうすんの？」

倉田「・・・まあその時はその時で、また考えるから・・・（段々と声が小さくなる）」

奈美「（疑惑の目で倉田と洋子を見る）変ね、あんた達・・・」

短い間。

洋子「・・・あつヤダ忘れてた、ヨツちゃん帰つたのよ」

倉田「え!?!そ、そうだっけ？」

奈美「(驚いて)いつ？」

洋子「さつき、あなたがベランダ行く前」

奈美「ここ、通った？」

倉田「ああ通った通った」

奈美「いつ!?!あたし見なかったわよ！」

洋子「パーツて、行っちゃったから」

倉田「昔、あのう、陸上の選手だったからね」

洋子「そうそう」

倉田「物凄いスピードで移動するんだよあのヨツちゃん」

洋子「慣れないとホント透明人間みたいなのよ」

倉田「毎朝駅まで走るんだけど、その間誰も気が付かないって言うんだから」

洋子「吉祥寺の8マンって言われてるの」

奈美「(感心して)オリンピック出れんじゃないの、そのヨツちゃん」

倉田「いや、それは皆が勧めてるんだけど、絶対ウンとは言わないだよ。もう信じられないぐらいのテレ屋でね、人目につきたくないばかりに、そこまでのスピードに自分を高めた人だから」

奈美「ふーん……」

洋子「で、どう思う？」

奈美「問題は持久力よね、百メートルだったら敵なしだと思うけど」

倉田「(しばらく考えて) いやいや、ヨツちゃんじゃ無くてね、死体の話」

奈美「ああ、消えた死体ね」

洋子「そう」

奈美「(手を差し出す)」

倉田「ん？」

奈美「延長料金。10時過ぎたから」

倉田「あ、幾ら？」

奈美「三万でいいわ」

洋子「ええっ、だって話してるだけじゃない!？」

奈美「だったら違う子呼んでよ(立ち上がる) あたしだって好きで話してるワケじゃないんだから」

倉田「払う払う払うから、ね、三万円……」

倉田、財布から金を出して奈美に渡す。

倉田「で、どう思う?」

奈美「・・・ズバリ、奥さんの陰謀ね」

倉田「女房の?」

洋子「どうして!?!」

奈美「だって無茶苦茶怪しいじゃん、その看護師の奥さん」

洋子「ど、どこが、どこが怪しいって言うのよ!?!」

奈美「病院から毒薬なんか持ち出しちゃってさ、その時点でもう犯罪じゃんか」

洋子「それは夫を助けるためでしょ?彼の新作の参考資料として持って来たんだから」

奈美「表向きはね」

倉田「表向き?」

洋子「どういう意味?表向きって」

奈美「だって、本に書くためだったら名前だけ分かれば充分じゃん、わざわざ本物持って来なくてもさ」

短い間。

倉田「そりやそうだ・・・」

奈美「つまり彼女は、旦那に人殺しをさせたかったワケよ」

倉田「・・・!!」

洋子「何のために？」

奈美「そうね・・・（考える）」

倉田「あっ!・・・」

二人「（倉田を見る）」

倉田「まさか、夫を毒殺するつもりだったんじゃない・・・」

二人、呆れる。

奈美「はあ？」

洋子「だったらわざわざ毒薬渡さないでしょ？」

奈美「もうちよっと頭使いなって」

洋子「しっかりしてよ、もう!」

倉田「ちよっと、ちよっと思い付いただけじゃないか、そんな、
二人して、そんな・・・」

奈美「・・・やっぱりアレね、第三の男が居るわね」

倉田「第三の男？」

奈美「そいつが死体を隠したのよ」

倉田「誰だそれ？」

奈美「奥さんの浮気の相手」

倉田「(ハツとなり)アッ・・・」

奈美「それをネタに旦那を脅迫するつもりなのよ」

倉田「(愕然と)脅迫!？」

奈美「死体がどこにあるか分かんないや、旦那は手の打ちようが無いからね」

倉田「な、成る程・・・」

奈美「死体さえ握ってれば旦那はもう思いのままよ。そんなでもって目出度く離婚は成立して、旦那は残りの人生かけて奥さんに金を貢ぎ続けるってワケよ」

洋子「だけど奥さんも共犯でしょ？」

奈美「いざとなったら夫に脅されたって証言出来るわ。殺すぞつて言われて仕方なく夫を手伝った。そうになったら週刊誌はほっとかないわよ。旦那は間違いなく死刑になるわね」

倉田「ひ、ひどい、ひど過ぎる・・・」

洋子「それはちよつと、どうかしら」

奈美「なに？」

洋子「だって、そのために人を殺させたって言うの？離婚して慰謝料を請求するために？」

奈美「慰謝料どころの額じゃ無いって、一生絞り取るんだから」

洋子「あたしだったらそんな事しません、離婚したけりや堂々と

言います」

奈美「そしたら奥さんの方が裁判じゃ絶対に不利よ。逆に旦那に慰謝料を請求されちゃうじゃん」

洋子「(倉田に) あなたあたしに請求する？」

倉田「は？」

洋子「そうだったらよ、あたしが浮気をしたとして、あなたあたしに慰謝料を請求する？」

倉田「いや、そんな事急に言われたって・・・」

奈美「請求するわよそりゃ。普通そうじゃん」

洋子「結婚ってそんなものじゃないの、夫婦が一緒に居るって事は、お金とは全然次元の違う話なの、慰謝料請求されるのが怖いから一緒に居るだけの事じゃないの！」

奈美「夫婦と言えど、元は他人なんだからね」

洋子「あなたはご存じ無いでしょうけど、あたし達には二人だけの約束があるんです。ね、覚えてるでしょあなた、あたし達の結婚前の約束」

倉田「ああ、そりゃもちろん覚えてるけど・・・」

奈美「何よ、その約束って？」

洋子「お互いに縛り合うのはやめましようって事。無理して結婚生活が続けるなんて、それはどちらの為にもならないから」

奈美「だったら浮気したもん勝ちじゃん」

洋子「あなたには分かってないの。あたし達はお互いが、この人生でただ一人の相手だって信じ合えたから結婚したの。そして今でも信じ続けて居るから一緒に居られるの。あたし達の結婚は書類だけの問題じゃないの」

倉田「(感動している) 洋子・・・」

洋子「(優しく) そうでしょ、あなた？」

倉田「・・・許してくれ。僕は今、君をほんのちよつとだけ疑ってしまった・・・」

洋子「(微笑んで) お馬鹿さん」

奈美「・・・ねえ、これ何の話？」

倉田「え？」

奈美「新作のアイデアをあたしに聞いてんじやなかったの？」

倉田「いや、もちろんそうだよ」

奈美「なんかさア、『走れメロス』みたいなんですけど」

倉田「(笑ってごまかし) 文学的だね君は」

奈美「ノロケるんなら他の人にしてよね、ホント・・・」

倉田「うん、じゃ、ま、あのう、本題に戻ろう」

洋子「奥さんの仕業じゃ無いとしたら、どういう事になるのかしら？」

奈美「・・・マ、どっちにしても夫婦の立場は変わらないわね」

倉田「と言うと？」

洋子「誰かがその夫婦を脅迫するために、死体を隠したって事ね」

奈美「それしか死体を隠す意味が無いもんね」

洋子「もう一人、そこで殺人があった事を知っている人物・・・」

短い間。

倉田「・・・隣の男はどうなんだろう？」

奈美「誰よそれ？」

倉田「劇作家の隣に男が一人で住んでるんだよ、こいつが結構不

審な人物なんだ」

奈美「壁に穴開けて覗いたの？」

倉田「そいつはチャイムも鳴らさずにいきなりガチャツと入ってくる様な男なんだよ、無神経でガサツでき、自分ちに無い物は全部人んちから調達する男なんだよ。・・・ああっ！」

奈美「なによいきなり・・・」

倉田「そいつは死体を見てるんだ！」

奈美「え？」

洋子「そうね、奥さんと一緒に死体をベットまで運んでるわ・・・」

・」

奈美「……共犯者なの？」

倉田「いや、醤油を借りに来たんだ……ん？味噌だったかな・
・」

洋子「それで夫がヘルニアだったから、代わりに運んでくれたの」

奈美「親切なんじゃん。」

倉田「何が親切なもんか、人んちの調味料で食費を浮かそうなんて考えてる奴なんだから……（立上がり）ああそうかつ、
奴の狙いは醤油と味噌だっ！（二人の視線を感じて座り）
いや、もうちよつと良く考えてみるか……」

奈美「もしかしてソイツ、奥さんに惚れてんじゃない？」

倉田「ああつ、そ、それだ……それをネタに女房に言い寄るつもりなんだ！ひ、卑劣な、なんて卑劣な！」

奈美「面白がつて）貞淑な妻の、操の危機つてヤツね」

倉田「畜生、警察だ、警察に電話してやる！」

奈美「ホントに電話してどうすんの？それに電話止められてんで
しよ？」

倉田「あ、……ああ、そうか、つい興奮しちゃった……」

奈美「となると、次の犠牲者は旦那かな？」

倉田「え？」

奈美「やっぱり邪魔だからね、色々」と

倉田「ク、クソう、畜生、あん畜生！」

奈美「そのうち、段々奥さんもその危険な男に惹かれちゃってさ」

倉田「あ、あった、そういう映画あった！」

奈美「ラストは二人で逃避行、真実の愛は見事に敗北」

倉田「（頭を抱えて）い、いやだ、そんなの嫌だっ！」

洋子「・・・死体を見た人間なら、もう一人居るわよ」

短い間。

奈美「だれ？」

洋子「（奈美を見詰めて）謎の女」

奈美「謎の女？」

洋子「ねえ、あたしずっと考えてたんだけど・・・」

倉田「なに？」

洋子「ホテル嬢ってかなり危険な仕事なんじゃない？」

倉田「危険？」

洋子「部屋で待ってるのはどんな相手なのか分からない訳でしょ

？変質者かも知れないし、もしかしたら、人殺しなのかも知れない」

奈美「まあそうね。だからあたし達防犯ベルは必需品よ」

洋子「(納得して) ああ、防犯ベル」

奈美「それ鳴らすと、お店の人が駆け付けてくれるの。コワモチのお兄ちゃんがね」

洋子「つまりあなた達は、一人では仕事先に行かない訳ね？」

奈美「そうね、大抵はお店のお兄ちゃんが車で送ってくれるね」

洋子「それでその人は仕事が終わるまで待ってる訳でしょ？何かあったら駆け付けられる様に」

奈美「そういう事」

洋子「(倉田に) 変じゃない？」

倉田「ん？」

洋子「変でしょ？とつても」

倉田「・・・何が？」

洋子「(奈美に) あなた達、部屋を間違える事ってよくあるの？」

奈美「まず無いわね」

洋子「もし間違えたとして、相手がそれを黙ってたら、その時はどうなるの？」

奈美「そりゃお店から連絡がくんじゃない？ホントの客が電話するんだらうから。まだ来ないけど、どうなってんのって」

洋子「それであたしに連絡がつかないとしたら、待ってるお店の

お兄ちゃんに連絡する筈よね？」

奈美「・・・じゃないの？」

洋子「(倉田に) だったらどうしてこの人ここに居るの？」

倉田「・・・!!」

奈美「ちよっと、それどういう意味？」

洋子「(悠然と) あたしとつても変だと思うわ」

奈美「どういう意味よっ！」

倉田「あ、ちよっと落ち着いて、ー」

奈美「(遮って) 延長するって言ったのソツチでしょ!?(倉田に)

ねえ、あんたが言ったんでしょ延長するって、違う? あたし延長してくれてあんたに頼んだ!?

倉田「いやいや、あのう、そういう事じゃなくてね、ー」

奈美「(遮って) 何なのあの言い方、あんた達あたしの事馬鹿にしてんの?」

倉田「ば、馬鹿になんかしてないさ、馬鹿にする訳ないよ、だつてホラ、君はとっても頭のいい人だから、参考意見を聞かせて欲しいって、こうして頼んでるくらいなんだからさ・・・」

奈美「ああそう、あたしの意見が聞きたいワケ？」

倉田「そう、そうなんだよ」

奈美「じゃ言ってあげる、よつく聞いててね、あんたの女房は最低最悪のイヤミ女！これがあたしの最終意見よっ！」

洋子「なによアバズレっ！」

奈美「うっせえ、ババアっ！」

倉田「まあまあ、ちよつと落ち着こう・・・」

奈美と洋子はしばらく睨み合い、同時に顔を背ける。

倉田「み、水、ね、皆で水を飲もう！」

倉田、水差しの水を三つのグラスに注ぐ。

倉田「(素頓狂な声で) あ、あれっ!？」

洋子「・・・どうしたの？」

倉田「(瓶を取り上げて) な、無い・・・空になってる！」

奈美「奥さんが飲んだんじゃないの、あたしが帰った後ハッスルするために」

倉田「(怖々とグラスをテーブルに置いて後退る)」

奈美「・・・どうしたのよ？」

倉田「だ、誰かが僕の命を狙ってる・・・」

奈美「は？」

倉田「誰かが僕を殺すつもりなんだ・・・」

洋子「あなた・・・」

倉田「誰だ、一体誰なんだっ!？」

洋子「あなた落ち着いて、誰がそんな事考えるって言うの？」

倉田「ぼ、僕が興奮しやすい性格だって知ってる奴だっ、それで

この水差しに入れて、興奮した僕が水を飲むのを待ってたんだ！」

奈美「あなたはちよつと黙ってて」

奈美「あたしは意見を求められたの」

洋子「あなたの意見なんかどうでもいいのっ！」

奈美「あんたに意見なんか言ってるわいよっ！」

倉田「(悲鳴) や、やめてくれえ！僕を殺さないでくれえ！」

洋子「あ、あなた・・・」

倉田「こ、殺される、僕は殺されるっ！」

奈美「(グラスを倉田に差し出して) はい、お水」

倉田「(悲鳴を上げる)」

奈美「な、何よ・・・」

倉田「(三人同時に) 殺される、僕はこの歳でこの若さで殺される！僕は殺されてしまうんだ！御免なさいセミさん、ホ

ントに御免なさい、セミさんどうか僕を許して下さい！」

洋子「(三人同時に) そのお水はダメなの、余計興奮しちゃうんだから！大丈夫、大丈夫よ、いい子だから落ち着いて。誰もあなたを殺そうなんて思ってないから。セミさんだって忘れてるわよ」

奈美「(三人同時に) 何よ、ただの水でしょ!? え、何? なんでこの水じゃダメなの? あたし親切に水を差し出しただけじゃない? セミ? 何よセミって? セミが一体どうしたって言うのよ!」

奈美「ちよつと! いっぺんに喋るのやめてくんないっ!」

倉田「(荒い息遣い)」

奈美「(洋子に) 何時もこうなっちゃうの?」

洋子「(倉田の背中を擦りながら) この人の神経はガラス細工なの」

奈美「作家に向いてないんじゃない?」

倉田「向いてない、確かに僕は向いてない」

洋子「何言ってるの、あなたは天才なんだから」

倉田「・・・本当?」

洋子「あたしが嘘ついたことある?」

奈美「・・・そんでセミって何よ?」

倉田「(悲鳴) ああつ、セミさんが、セミさんが笑ってるウツ！」

洋子「大丈夫だから、セミさんは天国で幸せに生きてるから」

奈美「(少し怖くなって二人から離れる)」

倉田「だけどセミさんはね、セミさんはあんなに短い一生を、僕のためにもっと短くさせられて、きつと怒ってると思うんだよ」

洋子「しょうがないわよ、昆虫採集だったんだから」

奈美「ねえ、何の話なの、それ？」

倉田「復讐なんだ、これはセミさんの復讐・・・(驚愕) ああつ！」

奈美「ちよつと、救急車呼んだ方がいいんじゃない？」

倉田「・・・そうだ、復讐だ」

洋子「だからセミさんは・・・」

倉田「彼女は復讐しようとしてるんだ」

奈美「・・・彼女って？」

倉田「この物語に、まだ登場していない人物だ・・・」

洋子「・・・ああ」

奈美「誰よ、それ？」

倉田「殺された男の妹」

奈美「妹？妹がいたの？」

洋子「そう、その子が来るから、大急ぎで死体を片付けたの」
奈美「何しに来んの？」

洋子「（倉田に）何しにだっけ？」

倉田「・・・何かしに・・・」

奈美「で、その妹は兄貴が殺された事知ってんの？」

倉田「いや、それは分からないと思うんだけど・・・」

奈美「そんじゃ復讐のしようが無いじゃん」

倉田「そうなんだ、そうんだけど・・・」

洋子「あなた、考え過ぎよ」

奈美「ちよつと考えた方がいいのよ、今まで考え無さ過ぎだった
んだから」

倉田、この一言に傷ついて、爪をかみながら涙をこらえる。

洋子「ねえ、どうして一々この人の神経逆撫でするの？」

倉田「あ、あれだ・・・」

洋子「え？」

倉田「携帯電話だ！」

奈美「は？」

倉田「男の携帯電話が鳴ったんだ、2回!!」

短い間。

洋子「・・・それじゃあの電話は？」

倉田「そうなんだ、妹からの電話だったんだ！」

奈美「そんで？」

倉田「あの人は電話のコールを3回以上絶対鳴らさない人だった、プロデューサーは電話が命だって何時も言ってた人だったんだ」

洋子「それが2度も出なかった・・・」

倉田「妹が何かあったと感付いて、ベランダから覗いて見てたとしたら・・・」

洋子「兄さんの死体を見た訳ね・・・」

奈美「電話に出ない位でベランダから覗く？」

倉田「もしかして、もしかして男は身の危険を薄々感じていて、それを妹に言い残して行ったとしたら？」

奈美「だったら妹と一緒に来るんじゃない？」

倉田「いや、そうしたら二人とも殺されてしまうかも知れない、そこで男は、何かあったら俺のかたきを討ってくれと・・・」

・」

奈美「ちよっとジャンルが変わって来たわね・・・」

洋子「それじゃ妹が死体を片付けたの？」

奈美「女一人じゃ無理なんじゃない？」

倉田「いや、・・・そうだ、彼はまだ死んではいなかったんだ」

洋子「え？」

倉田「虫の息ではあったけれども、死んだフリをしていたんだ。

そして妹に助けられて何とか植え込みを乗り越えた直後に、
そこで絶命してしまったんだ」

奈美「そんじゃ道路に死体が転がってんの？」

倉田「この世の中に有り得ない事なんて一つも無いっ！」

奈美「それはお客さん怒ると思うよ、あたし」

洋子「誰かが助けてくれたのかもね、酔っ払いだって嘘ついて・

・・・」

倉田「(叫ぶ)隣のアイツだっ！」

洋子「また？」

奈美「ちよっとさ、都合良すぎないその人の出方？」

倉田「そういうヤツなんだよアイツは、何時も狙ったように出て

来る男なんだ！」

奈美「だけどさ、助けて貰って何処行くの？」

倉田「……何処行つたんだろ？」

短い間。

倉田「……まさか、隣に？」

二人「……」

倉田「妹は、隣のアイツの部屋に……」

二人「……」

倉田「(興奮) そうなんだ、これはやっぱり復讐なんだ……」

奈美「(心配になって) やっぱり救急車呼んだ方がいいよ。奥さん持ってたでしょ、携帯電話」

洋子「え？」

奈美「携帯電話、持ってたでしょ？」

洋子「どうして？……」

奈美「だってさつき電話してたじゃない？こっちは順調だとか、うまくいってるとか……旦那さんは知らなかったみたいだけど、奥さんが携帯持ってたの」

間。

奈美「（倉田に）だって、ねえ、さっきあたしに携帯無いって言うってたじゃん……」

間。

奈美「なによ……」

間。

奈美「……あたしが電話してもいいけど、あたしの携帯、バッテリー切れてるからさ……」

倉田「いつ？」

奈美「ここに来る前」

倉田「そうじゃなくて……」

奈美「え？」

倉田「いつ、電話してたの？」

奈美「あ、奥さん？えっとね、あんたが真っ青な顔でベットの下の覗いてた時」

倉田「……（洋子に）電話したの？」

洋子「あの、それはね……」

倉田「誰に電話したの？」

洋子「あなたたちよつと落ち着いて・・・」

倉田「何が順調だったの？」

洋子「違うの、これには訳があるのよ・・・」

倉田「(段々興奮して)君は僕と離婚したいの？」

洋子「なに言ってるの！」

倉田「じゃどうしてああしよつちゅう隣の倉田が家に来るの!？」

洋子「知らないわよ、そんな事!!」

幸治「(玄関から現れて)倉田さん・・・」

倉田「(半狂乱)うわあーっ！」

幸治「(驚いて)な、なんスか？」

倉田「(怯えて)こ、今度は何が欲しいんです、ああ!う、家の女房ですかっ!？」

幸治「は？」

洋子「あなたっ！」

倉田「そうだったんだ、やっぱりそうだったんだ、(奈美に)ほら、これで何もかも辻褄が合うじゃないかっ！」

幸治「大丈夫スか、倉田さん(倉田に手を掛けようとする)」

倉田「触るなア、僕に触らないでくれっ！」

幸治「(怯えて洋子に)あの薬飲むところなるんスか？」

倉田「た、助けに来てくれーっ、ぼ、僕は、僕は一生この二人に絞られ続けるんだーっ！」

洋子「いい加減にして頂戴っ！」

倉田「いい加減にするのはお前の方だ！」

洋子「なんですって？」

倉田「もういい加減に芝居はやめてくれっ！」

洋子「あなた・・・」

倉田「僕は騙されていた、騙され続けていた！僕たちの結婚はデッチ上げだったんだっ！」

洋子「本気なの、あなた本気でそんな事言うの!？」

倉田「(泣く)何がただ一人の相手だ、何が信じ続けて居るだ・・・」

洋子「・・・」

倉田「言え正直につ、お前は一体誰に電話したんだっ!？」

短い間。

洋子「滝沢さん」

短い間。

倉田「ん？」

洋子「プロデューサーの滝沢さん！」

倉田「プロデューサーの、滝沢さん？」

洋子「そう」

倉田「プロデューサーの滝沢さんは、だってお前（回りを憚り）

いとこのヨツちゃんだろ？・・・」

洋子「生きてるの」

倉田「生きてるの？」

洋子「ピンピンして家に帰ってったわよっ！」

倉田「だ、だけど・・・それじゃあの瓶は!？」

洋子「あれはただの栄養剤」

倉田&幸治「（同時に）ええっ!？」

奈美「（幸治に）なんであんたが驚くの？」

洋子「考えれば分かるじゃない、そんな毒薬簡単に病院から持ち

出せる？」

幸治「（奈美に）・・・毒ってなんスか？」

倉田「（頭を抱えて）そこに気付かなかったっ!・・・」

洋子「・・・呆れてモノも言えないわ。（上手ドアへ退場）」

幸治「・・・（奈美に）何があったんスか？」

奈美「一組の夫婦が崩壊したの」

幸治「あ、俺がああ薬飲んじゃったから？」

奈美「・・・！あんたが飲んだの？」

洋子がトランクと数着の衣類を持って現れる。

倉田「だけど、だけどそれならどうして？」

洋子「(荷物をトランクに詰めながら) 滝沢さんが言ったの」

倉田「は？」

洋子「滝沢さんが言って来たの！」

倉田「なんて？」

洋子「あなたは一度犯罪者の心理を味わった方がいいんですって」

倉田「どうして僕が？」

洋子「あなたに才能が無いからでしょ」

倉田「え？」

洋子「あなたが面白くもない本ばかり書くからでしょ！」

倉田「それで君がああ毒を？」

洋子「栄養剤！」

幸治「それはああ、どんぐらいの効果がある栄養剤なんですよか？」

洋子「健康体には、ほとんど水と変わりません」

倉田「ほとんど、水・・・」

幸治「そんな、もう電話しちやっただのに・・・」

倉田「どうしてこんな馬鹿な真似を!？」

洋子「あなたのオツムが馬鹿だから」

倉田「・・・!」

奈美「それにこんな事でもなきや、倉田さんはあたしの意見なんか聞いてくれなかったでしょ？」

全員、奈美を見る。

倉田「君の意見？」

奈美「初めまして、滝沢です」

幸治「・・・倉田です」

奈美「あら、あなたも倉田さんなの？」

幸治「そうなんスよ、良く郵便が間違えて来るんスよ」

倉田「・・・滝沢、さん？」

奈美「はい」

倉田「妹さん？共同執筆の？」

奈美「はい」

洋子「……そう、やっぱりね。じゃこれは全部？」

奈美「ほとんど、あたしの筋書きです」

倉田「君の？」

奈美「ちよつとしたイレギュラーはありましたけど」

洋子「あたし達には決定的なイレギュラーだったわ」

倉田「ちよつと待って、ちよつと待って！えーつと、それじゃ滝

沢さんは死んだ真似をしてたの？」

洋子「そう」

倉田「そんでベランダから出て行ったの？植え込み跨いで？」

洋子「そのために靴と鞆をあっちに持ってったの」

倉田「ああ、成る程！（幸治を指し）じゃ、コイツは？」

洋子「隣の倉田さん」

幸治「倉田です」

倉田「コイツは何しに来たの？」

洋子「お米でも足りなくなったんじゃない？」

幸治「いや、もうメシは終わりました」

倉田「……（洋子に）それで、君は何をしてるの？」

洋子「見て分からない？出て行くの」

倉田「出て行くっ!？」

洋子「約束だったでしょ？」

倉田「何の約束？」

洋子「お互いに縛り合わないって」

倉田「（驚いて）え？ちよつと待って、これで終りなの？こんな事で僕たちの結婚生活は終わっちゃうの!？」

洋子「信頼のない夫婦生活なんてあたしには耐えられませんから」

倉田「よ、洋子！」

洋子「離婚届けは郵送します」

幸治「まアまア奥さん落ち着いて、ね、そこ座って座って、ホラ倉田さんも座って」

洋子「何なんですか、あなた？」

倉田「そうなんだよ、コイツは一体何なんだよ!？」

幸治「隣の倉田ですよ」

倉田「隣の倉田は分かかってるんですよ、一体あなたは何時になつたらドアチャイムを鳴らして入って来るのかって、僕はそれが聞きたいんですよっ！」

幸治「（怒って）そんな事言ってる場合じゃないでしょ今はっ！」

倉田「・・・そりゃそうだ（洋子に）お願いだから、良く話し合おう」

洋子「話し合う事なんかありません」

倉田「どうして、僕達うまくやってたじゃないか、こんな事さえ

なきや」

洋子「……うまくやってた？」

倉田「そうだよ」

洋子「……あなた、本当にそう思ってるの？」

倉田「君は思わないのかい？」

短い間。

洋子、腰を下ろす。

幸治「それで、原因は何なんスか？」

倉田「いや、単なる勘違いなんです、ほんの些細な行き違いです」

洋子「(冷たく)些細な問題じゃありません」

倉田「洋子……」

洋子「些細な問題なんかじゃありません！」

幸治「……こりやダメだな」

倉田「(幸治に)ちよつとちよつと！」

幸治「一体何やらかしたんスカ倉田さん」

倉田「いや、ちよつとそのう、僕の勘違いで……」

洋子「別に、あなただけの責任じゃ無いわ……」

倉田、洋子を見る。

洋子「あたし達二人に問題があったの……」

倉田「それはだから、つまり、僕に才能が無いからだろうか？」

洋子「……」

倉田「僕がロクでもない本しか書けないもんだから、君達はこんな芝居までして、そうなんだろう？……」

洋子「……」

倉田「……有り難う、皆僕に協力してくれてたんだよね。なのに僕は、君にひどい事を言ってしまったんだよね……」

洋子「そうじゃないの」

倉田「……ん？」

洋子「そうじゃないのよ」

倉田「そうじゃないって？」

洋子「（寂しく笑って）あなたって本当に鈍感なのね」

倉田「……」

洋子「……いい加減に芝居はやめろって言ったわよね」

倉田「……え？」

洋子「あなた、いい加減に芝居はやめろって、言ったでしょ？」

倉田「それは、――」

洋子「(遮って) あたし、疲れちゃったの、お芝居する事に。あたしは、ずっといい奥さんを演じてただけなの」

倉田「・・・演じてた？」

洋子「あたし夢見てたの、素晴らしい結婚生活。家庭には何時も笑いがあったって、夫婦は互いにいたわり合って、励まし合って、愛し合って、何時までも幸せで・・・だけど現実はどう？どんなに働いても生活は楽にならない、平凡で、退屈で、欲求不満の毎日・・・あたし、それを認めるのが怖かったから、ずっとお芝居して来たの、毎日毎日朝から晩まで。そう、あたしは自分で自分を縛り付けてただけ・・・もううんざりなの、いい奥さんであり続けるのも、あなたの新作を読んで聞かされるのも・・・」

倉田「・・・！」

洋子「だって面白くないんだもの・・・」

倉田「(うなだれる)」

幸治「キツツイなアこれは・・・」

洋子「もう限界なのよ、あたし」

短い間。

洋子「・・・ねえ、あなた」

倉田「（顔を上げる）」

洋子「今夜、こんな大騒ぎをしながら、あたしが何を考えてたと思う？」

倉田「・・・何を考えてたの？」

洋子「（瓶を見詰めて）この毒薬が本物だったら、あたしは何をしたんだろうって・・・」

洋子、瓶を見詰め続ける。

間。

奈美「・・・何をしました？」

洋子「（奈美を見て微笑み）・・・言いたくないわ」

洋子、立ち上がって玄関に向かうが、ふと原稿に目を留めて

洋子「そう、この本の題名通りね。人生は、『ハッピーエンドだ
けじゃない』・・・」

倉田「・・・」

洋子「(弱々しく微笑み)ご心配なさららないで、慰謝料を請求してあなたをゆするつもりなんかありませんから・・・(玄関へ退場)」

間。

倉田「・・・(幸治に)何か？」

幸治「は？」

倉田「何かご用ですか？」

幸治「あ、あのう、電球の球、予備買ったの思い出したんで、ども、有り難うございました」

倉田「いえ・・・」

幸治「(電球をテーブルに置く)・・・倉田さん、あのう・・・」

倉田「・・・(幸治を見る)」

幸治「今度、いいお店紹介しますよ、ソーブランド」

倉田「・・・」

幸治「ほら作家なんだから、色々取材しなきゃ、ね！」

倉田「・・・どうも」

幸治「いいえ、お互い様ですよ。それじゃ、お休みなさい」

隣の倉田が玄関へ退場する。

短い間。

倉田、ゆつくりと奈美を見詰める。

倉田「・・・慰謝料、いらないうって」

奈美「聞いてた通りの性格ね、あなたの奥さん。（満足気に頷い

て）筋書き通り」

倉田「君は、天才だ！」

二人、抱き合う。

奈美「ひどい人、あんなに奥さんを追い詰めちゃって」

倉田「僕の作風が彼女に合わなかっただけだよ」

奈美「奥さんに文才があれば問題は無かったのにね」

倉田「そんな、君みたいな女性が他に居るもんか」

奈美「ま、そりゃそうだけど」

倉田「信じられない、こんなに何も彼もうまく行くなんて」

奈美「けどまだ。問題が一つ残ってるわ」

倉田「（心配になり）なに？」

奈美「兄貴には何て言うつもり？」

倉田「滝沢さん？」

奈美「そう、あのバカちんプロデューサー。あれで結構難敵よ」

倉田「それはもう考えてある」

奈美「何て言うの？」

倉田「共同執筆には、共同生活が必要です」

奈美「あなた天才っ！」

倉田「(嬉しい) 本当？」

奈美「(原稿を取って) そして、最後の台詞ね。(咳払いして読

む) 『あたし達、これからどうなるの?』 (倉田を見る) 」

倉田「『そう、ハッピーエンドにでも、しようか』」

二人、大いに笑い合う。

ゆっくりと明りが落ちて、幕。